

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 土佐桂子



学位申請者 合地幸子

論文名 高齢者ケアと現代ジャワの家族——ンガンチャニ(そばに居る)とい
うことの社会的動態

【審査結果】

2019年7月12日、土佐桂子(主査)、青山亨、西井涼子、宮崎恒二(本学名誉教授)、速水洋子(京都大学東南アジア研究所)からなる審査委員会は、合地幸子氏より提出された博士学位請求論文「高齢者ケアと現代ジャワの家族——ンガンチャニ(そばに居る)ということの社会的動態」の審査および後述による最終試験(公開審査)を実施し、満場一致で博士(学術)の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

【論文の構成】

序章

第1章 調査地概要

第2章 インドネシアにおける高齢者医療・福祉の幕開け

第3章 住民参加型地域保健活動・高齢者ボスヤンドゥ活動

第4章 現代ジャワにおける高齢者をめぐる家族圏

第5章 病いを患う老親のそばに居ること

終章

参考文献

【論文の概要】

本論文は、インドネシア共和国(以後、インドネシア)における高齢者ケアのあり方、ケアをめぐる人々の関係性などを、ジョグジャカルタ特別州(以後、ジョグジャカルタ)の農村調査を元にして明らかにするものである。

序章では先行研究との対照のなかで本研究の意義を述べている。先行研究の一つの方向性は、ケアの担い手を親族システムのなかで特定するというものである。例えば高齢者の健康状態に応じて、親族、近親者、家族の順で負担の期待が増え、身体的ケアが必要となる場合には娘に頼るとされてきた。他方、近年のケア研究の潮流としては、社会全体がいかにケアを担うかが重要な視点とな

り、インドネシアにおいても、社会（自助、私、協、民、公）におけるケアに関わる支援関係に注目する研究が存在する。それに対して本論文は、ケアの担い手が誰かという単純な問いに還元せず、ケアをめぐる幅広い実践のなかで誰がいかなる形で関与するかを分析する。とくに「そばに居る（ンガンチャニ）」ということの重要性を示すのが目的である。ンガンチャニとは広義に「寄り添う」という意味をもち、距離あるいは関係性の近さを表す概念であり、ジャワにおいて日常的に見られる行動である。

第 1 章では、調査地の歴史的背景および現在の住民構成を概観する。この地域では、住民の多数がインフォーマルセクターに従事しており、インドネシアの平均でみても低収入に属する世帯が多く、子供の村外への流出が多いという特徴を示している。

第 2 章では、高齢者医療・福祉制度の整備状況および様々な福祉活動を分析し、民主化以降にインドネシア社会に表出する高齢化対策の特徴を明らかにしている。インドネシアにおける高齢化対策は、国際機関の動向に影響されている。その特徴は、世界保健機関（WHO）が提唱した「アクティブ・エイジング」の概念や WHO および国際連合児童基金（UNICEF）が提唱するプライマリー・ヘルス・ケア（PHC）の概念の下、コミュニティ・ベースによる福祉活動の中に位置付けられていった。そして、女性を動員した既存の福祉ネットワークを活用し、住民参加型の高齢者福祉活動（高齢者ポスヤンドゥ）を展開した。これがインドネシアにおける高齢化対策の最大の特徴であり、この活動を通じて、高齢者福祉にかかわる公的な領域が新たに作り出されたと指摘している。

第 3 章では、調査地において、住民参加型高齢者福祉活動がいかに展開しているかをジョグジャカルタ都市部の事例との比較を通じて考察している。調査地である村落の高齢者たちにとって、高齢者ポスヤンドゥ活動はひとつのセーフティーネットとして機能し、高齢者同士の連帯は強化されている。一方、活動を通して、高齢者同士がそばに居る状況が作り出されているが、参加者は主に健康状態の良い農民女性に限られている。他方で、高齢者ポスヤンドゥ活動を実施していない地域では、高齢者のそばに寄り添うのは、家族やボランティア女性であるカデルや地域住民の健康を管理するプラワット（看護師）であった。その他、教会や NGO の活動も高齢者ケアを担う側面があり、女性たちによる既存の福祉ネットワークのみに頼らない宗教活動や NGO 活動が、今後のインドネシアにおける高齢者福祉の一旦を担う可能性が見られる。

第 4 章では調査地における高齢者とりわけ独居高齢者の日常生活に注目し、独居が可能となる要因を検討することで、ケアをめぐる人びとの関係性を分析した。調査地の高齢者は家族の繁栄および経済的安定を見届けることを高齢期の理想像としている。論文内ではいくつかの典型的な事例が紹介される。例えば、村に生活の基盤を置いてきた社会階層の高い高齢者は、沢山の子供に囲まれて経済的に安定した老後を送っている。また、村の人びとと良好な関係性を築きながら、そばに居ることができる多くの「家族」に囲まれて暮らしていた独居高齢女性もいた。他方で、惚けてしまったとみなされた独居高齢男性は、人びととのあいだに友好的な関係が築けなくなり、独居が限界だと判断され、他地域に暮らす子供たちに引き取られた。その点では、高齢者はいずれ「家族」に看取られるという規範が根強いことが分かる。ただ「限界」とみなされる時期まで独居高齢者のそばに居て応答する人びとに着目する重要性も指摘できる。

第5章は、本論文の核となる「そばに居る(ンガンチャニ)」ことの重要性を示す、看取りの生じる高齢者ケアのあり方を考察している。病人には見舞いがなされるが、これは病者を社会に受け入れることでもあり、同時に、療養生活が長期化すると二者関係における友誼を深める目的で病者を訪問する行為が見られる。療養生活では都市部に移住した子供たちの健康意識も反映されている。具体的には、都市部中間層の健康志向の高まりが、農村部における消費生活において浸透しつつあり、従来の農村部では見られなかった療養生活に必要で便利なモノや保健医療サービスが購入される。

療養中の高齢者の世話は、人々が近親者と見なす同居家族が担う。しかし、先行研究では、ケアの担い手が女性に偏り、とりわけ「親密なケア」は血縁女性が担っているとされてきたが、村落内では、老親の身の回りの世話を妻、娘、嫁に規定する強い規範は聞かれず、男性も担い手となっている事例が見られる。一方、移住した子供や同一地区で暮らす子供たちは、ジャワにおける老親扶養の規範を前景化し、老親の身の回りの世話は同居血縁家族であるべきとする傾向にある。双方の葛藤や交渉を通じて、ケアは実際には、そばに居ることが出来る同居者が担うことになっている。結果的に調査地における看取りや高齢者ケアは、少ない成員のなかからそばに居ることが出来る近親者を再編する、あるいは、再編しようとすることによって成り立っているといえる。

【論文の評価】

最終審査では、日本を含む東アジアへケアの担い手を送り出す国として知られるインドネシアが、社会変化の中で高齢者ケアに関わるどのような問題に直面しているのかについて、近年広がりつつある高齢者医療・福祉制度の現状を明らかにしつつ、制度からこぼれ落ちる人々の事例をきちんと踏まえ、総合的に明らかにしようとしている点が評価された。

とりわけ、合地氏が調査した村は教育や就職で村を離れるものが多く、高齢者ケアは厳しい状況に晒されている。こうした状況下、看取りに至る過程を丹念に追いつつ、ケアをする／されるといった固定的ケア概念にとらわれず、寄り添う、見守る等もケア実践に含め、より広い脈絡でケアを捉え直そうとしており、その問題意識が高く評価された。

それとともに、いくつかの問題点や疑問点も審査委員から示された。審査委員からさまざまな形で提示された疑問の一つは、「ンガンチャニ」という概念にある。ここに着目したことは興味深いものの、実際には、エミクな概念としていかに住民が自覚的にとらえているのかがわかりにくいなどの指摘があった。これについては、現地の人々の具体的事例から、合地氏が分析概念として取り出したものであるとの答えであった。その他、このンガンチャニの事例として書かれたものは個別事例でもあり、この分析がどれほど広い汎用性を持つのかといった問いもあった。この問いは、人類学的調査においては常に問題にされる点であるが、合地氏は個別的事例が必ずしも特殊事例であるわけではなく、事例を深く検討することにより現地社会の状況の一端を示すことは可能であるとの見解を示した。合地氏は審査員からの質問やコメントに対して、いずれも真摯に、かつ誠実に答え、今後の課題とする部分については、謙虚にその展望を回答した。

【総合的な判断】

以上、論文審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が学術的に重要な貢献をもたらすものであり、合地幸子氏に博士(学術)の学位を授与することが適切であるという結論に達した。